

自主シンポジウム16

多文化保育の現状と課題

企画者	谷口正子（大阪国際大学）	話題提供者	森本恵美子（大阪国際大学短期大学部）
	森本恵美子（大阪国際大学短期大学部）		奥田輝代（めぐみ保育園）
	山岡テイ（情報教育研究所）		武田真由美（多文化保育園）
	朴 淳香（鶴見大学短期大学部）		山岡テイ（情報教育研究所）
司会者	谷口正子（大阪国際大学）	指定討論者	日浦直美（聖和大学）

企画趣旨・討論の意図

1980年代以降、日本に住む外国籍の人は急増している。外国人登録者数は2002年末には約185万人であり、その構成割合は、韓国・朝鮮籍が33.8%、中国籍が22.9%、ブラジル国籍が14.5%、フィリピン国籍が9.1%、ペルー国籍が2.8%、米国籍が2.6%、その他14.3%である。年齢をみると20歳代と30歳代が外国人登録者数の53.9%を占めている（法務局入国管理局 平成15年）。

そのような中で多くの家族が子どもを保育園や幼稚園に通わせている。園では日本語能力や文化の違いによっておこる様々な課題解決のために種々の実践がなされている。背景に異なる文化をもつ65カ国籍の保護者を対象とした“多文化子育て調査”の結果からは園の先生を頼りにして感謝しつつも、保護者たちは園生活や子育て全般に大きな気がかりを抱えていた。

これらの現状を踏まえて、①多文化子育て調査に見られた園や子育て上の不安から保護者への支援②地域の中で多様な文化をもつ子ども達への関わりの実践報告③多文化保育園の取り組みと課題④多文化社会が進むオーストラリア、ニュージーランド、アメリカでの多文化理解保育の現状報告の多面的な話題提供をもとに、日本における今後の多文化保育のあり方を参加者とともに議論したい。

『多文化子育て調査を実施して』

大阪国際大学短期大学部 森本恵美子

園生活及び子育て生活について、多文化を背景にもつ保護者（以後多文化保護者）を対象に、11言語による質問紙調査を実施し、65ヶ国籍2002人の回答を得た。その結果を報告書にまとめ、ホームページにおいても日本語と英語で全文を公開した。さらに、報告書は回答使用言語として多かった英語・中国語・韓国語版にも翻訳した。

多文化子育て調査において、滞在年数の短い保護者が入園時にあたって多くあげていたのは「日本語がわから

ず情報収集が大変」「必要な書類を揃えるのが難しい」であった。滞在年数が短く日本語でのコミュニケーションが十分でないために生じる問題に対しては、行政などで対話カードの作成や通訳の派遣などの対応がとられるところが増えてきた。また、保護者の気がかりでは、素足保育は「中国」「ブラジル」「ペルー」、学習は「中国」、予防接種は「ブラジル」の保護者の率が高いなど出身の国による差異が顕著にみられた。

外国籍の親子との共生への試みが保育現場で増加しつつある現状であるが、今後はさらに個々の民族がもつ育児文化や成育背景への多文化的視点での理解が必要とされている。

今回は、多文化保護者のもつ園生活や子育て上の不安には「保護者が異なる文化の中で暮らす」ことで共通するものと、「保護者のもつ種々の状況の違い」によって異なるものがあることを示し、支援の在り方を考えたい。

『地域の文化と共に育つ』

社会福祉法人大阪キリスト教社会館
めぐみ保育園 奥田輝代

1. 概要

大阪大正区の地域性について・・・明治の富国強兵策の中紡績工場セメント、製鉄、造船の重化学工場が立ち、木材資場・港湾改修の事業のなかで出稼ぎ労働者が多く西日本から集まってきたところである。とりわけ沖縄出身者の多くクプンガーといわれる低湿地帯での劣悪な住環境にあって、「朝鮮人・沖縄人お断り」の立て札に象徴される住宅差別・就職差別が行われていたという。

2. 保育園の様子

万博景気を背景に、密集住宅の二度の大火から焼け出された住民の要求により改良住宅が建てられ、その一階部分に保育園として作られたのがめぐみ保育園である。園児も地域的にも沖縄とのかかわりを持つ子が40%近くを占めている。祖父母を一世、二世に持ち大正区に根付いて生活している子や地縁血縁のなかで往来する若い世代を持つ子とさまざまである。また一方でブラジルや

ベトナム、中国、フィリピンと出稼ぎ労働者として働く外国人の子どもたちも少なからず入園してくるケースも多い。

3. 文化を誇りに

子どもたちの育つ環境として親たちが育ってきた現実がいろいろな形で反映されている。理解しあえるためには私たちが思いを深め学び続けることが大切である。

沖縄をテーマにしたとりくみは当初は「何で沖縄ばかり」「何いっているかわからへん」という声も聞かれ、保護者の家をまわり話をしていく中で、少しずつ理解が広がって定着していった。わらべうた、遊び、踊り、食生活とさまざまな生活に根ざして、感覚の中に取り込む体験をとおして素直に楽しみ共感することができる。保護者にたいしても機会があるごとに紹介し、一緒に楽しんでいくこと、続けていくことが大切である。地域のなかでエイサーまつりが開催されたり、地域として子どもたちが育つための環境が必要である。子どもの発達とともに、子どもの育つ場が今とても大切であり問われていると思う。保育園をとおして子育ての発信をしていきたい。

『多文化保育園の取り組みと課題』

特定非営利活動法人多文化共生センター
多文化共生センター・ひょうご
多文化保育園 武田真由美

1. 多文化保育園設立の経緯と理念

多文化共生センターは、阪神大震災以降行ってきた外国人支援の活動から国籍・文化・言語や習慣などの違いにかかわらず誰でも満足して子どもを預けられる保育園の必要性を実感していた。このことから2001年3月、兵庫県コミュニティビジネス離陸応援助成により神戸市東灘区深江に多文化保育園を設立し、以下のミッションステートメントを目標に多文化保育実践への取り組みを始めた。

ミッションステートメント（抜粋）

多文化保育園は、様々な文化的背景を持った子どもたちが、その持てる力を精一杯伸ばし、自分自身や自分の家族に誇りを持ち、また互いの違いを尊重し、そして共に成長していけるような温かい環境作りを目指しています。この保育園は、ただ一方的に子どもを預けておくだけの場ではありません。外国人の親（保護者）と日本人の親（保護者）、保育士、スタッフ、周辺地域に住む人々、そしてボランティアが、子どもたちにとってより良い環境を作るために互いに助け合い、互いから学びあい、そして子どもたちと共に成長していけるような、地域に根を

下ろした保育園です。・・・

2. 実践の特徴

多文化保育園では、子どもたちのバランスのよい総合的な成長を目指しているが、特に以下の点に重点をおきながら様々な実践を展開している。

- ①多様な背景を持つ子どもたちとその保護者が「あたりまえ」の保育を受けられること
- ②全ての子どもたちが多様性から学びながら成長することができること
- ③地域や周囲の人々との関わりの中で育つことができること

3. 今後の目標と課題

- ①保護者及び地域住民の主体的参加
- ②多文化保育園における保育実践の意義と役割の再検討

『オーストラリア・ニュージーランド・アメリカなど

多文化国家の保育・教育支援』

情報教育研究所 山岡ティ

多民族国家として知られるオーストラリアは、現在、人口の4割が世界中からの移民やその子どもで構成されている。近年はアジア系移民が急増しているが、人口の約2%を占める先住民アボリジニやトレス海峡島嶼（とうしょ）民の言語も含む多文化理解教育を基盤にした多言語や教育プログラムが園や学校で実践されている。

また、ニュージーランドでは、あらゆる公的な文書や場所の標識には、2つの公用語である英語と先住民のマオリ語が併用表記されている。このように複数の言語と文化が共存する社会のニュージーランドでは、マオリだけでなく太平洋諸島出身の多様な民族との共生や理解を幼児教育のカリキュラムにも積極的に取り入れている。ニュージーランドの国勢調査によると、この10年の間にアジア人移民の中でも上位1位の中国人は2.3倍、2位のインド人は2倍、3位の韓国人は20倍に急増しており、他の英語圏においても、この3民族の移民ラッシュは特徴的な傾向であり、出産・育児、教育の分野でのアジア人への対応が急務になっている。

一方、さまざまな民族・宗教・文化が共存してきた歴史をもつアメリカでは、地方行政レベルで独自の教育支援プログラムを実施し、すでに、成果をあげている施設も多く見受けられる。

そこで、これら多文化社会先進国の保育・教育現場の最新事例の詳細を画像で紹介して、日本におけるアジア人を中心とした「多文化子育て調査」の結果と合わせて、今後の多文化保育・教育や支援のあり方を参加者とともに考察したい。